

術前バルーンカテーテルによる血行動態シュミレーションが有用であった腎 AVM の 1 例

総合南東北病院 放射線診断科 今井茂樹・川倉健治・井上崇

症例は 44 歳女性。検診で右腎臓に腫瘍を指摘され、近医泌尿器科受診し巨大腎 AVM と診断され IVR 目的に当院を紹介受診した。外傷歴はなかった。BNP は 41 と高値で心拡大も認めた。ダイナミック CT および CTA で右腎に巨大な動脈瘤様の血管性病変と早期静脈還流を認めた。右腎動脈と IVC は著明な拡大を認めた。AVF による動脈瘤様拡張か nidus が集合した cirroid type かの鑑別は CTA・MRA では困難であった。そこで血流コントロールとシャント部分の診断のためにバルーン付造影カテーテルを用いてシュミレーション後に IVR を施行した。カテーテルは 13mm 径のセレコン MP カテーテルを 6.7Fr ガイディングシースから右腎動脈に挿入し、評価用に 4Fr 造影カテーテルも右腎動脈に挿入した。バルーンを用いない造影では腎臓内血管は瞬時に IVC へ流出して腎臓内血管が観察不能であったため、バルーンを拡張した状態で造影を施行し AVF と診断した。正常血管が描出される位置までバルーンカテーテルを進め、血流コントロール下に AVF をコイル塞栓した。術後の MRA で右腎動脈は縮小し動脈瘤様病変は消失し、IVC への早期還流も認めなくなった。同時に BNP と心拡大も正常化した。